

---

# ジェネリック医薬品に関する処方実態調査 調査結果報告書

(要約版)

2006年12月  
株式会社プラメド

- 
- 1 . 調査概要 ( p.3)
  - 2 . 回答者属性 ( p.5)
  - 3 . 調査結果 ( p.8)
  - 4 . 調査結果のまとめ ( p.18)

---

# 1. 調査概要

## (1) 調査目的

生活習慣病を含む慢性疾患領域における、医師のジェネリック医薬品の処方実態を把握する。

対象となる疾患は、高血圧症、高脂血症、糖尿病、偏頭痛、喘息、アレルギー性鼻炎（花粉症）、アレルギー性皮膚炎、うつ・うつ症状の8疾患領域。

## (2) 調査設計

[調査対象] 上記慢性疾患の患者を診療する内科医、皮膚科医、耳鼻咽喉科医

[調査方法] インターネット調査

[調査期間] 2006年11月6日(月)～13日(月)

[回答者数] 646人

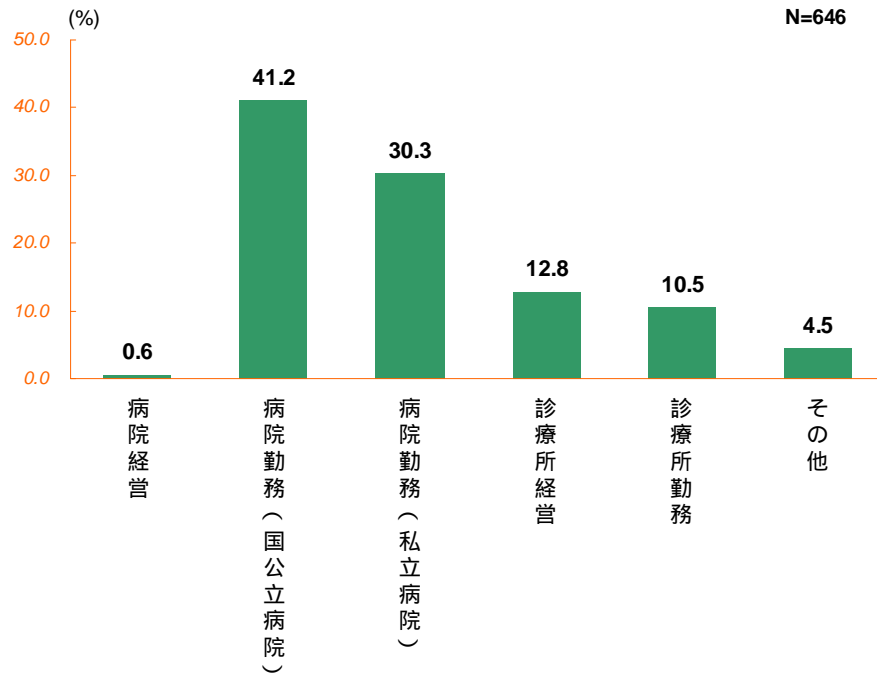
## (3) 調査項目

- 主な勤務先の勤務形態
- 主な勤務先の分業率（院外処方の割合）
- 施設における薬剤採用決定の関与度
- 疾患別の診療患者数（1ヵ月あたり外来患者数）
- 対象疾患用薬別のジェネリック医薬品処方割合
- ジェネリック医薬品の処方理由・非処方理由
- ジェネリック医薬品に関する患者からの質問有無とその内容
- ジェネリック医薬品の処方を要望する患者の増減とその割合
- ジェネリック医薬品全体への意見（自由回答）
- 属性（年齢、担当診療科、勤務先施設の病床規模）

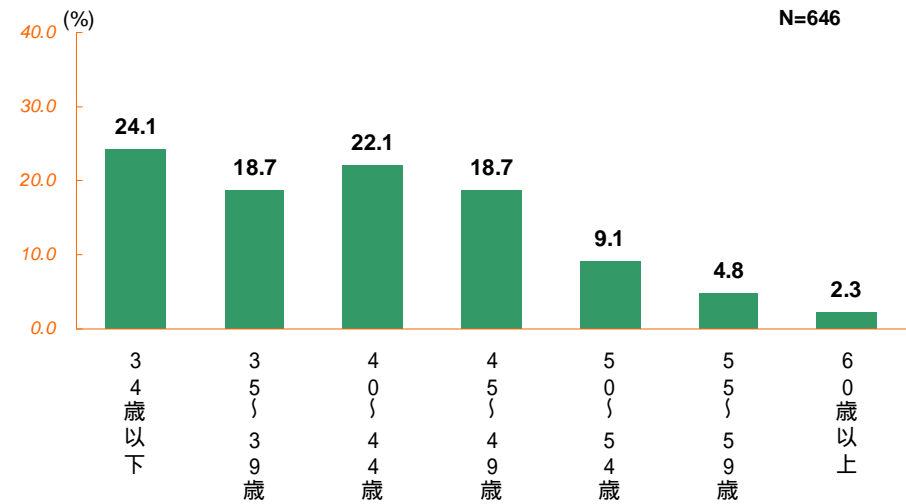
---

## 2. 回答者属性

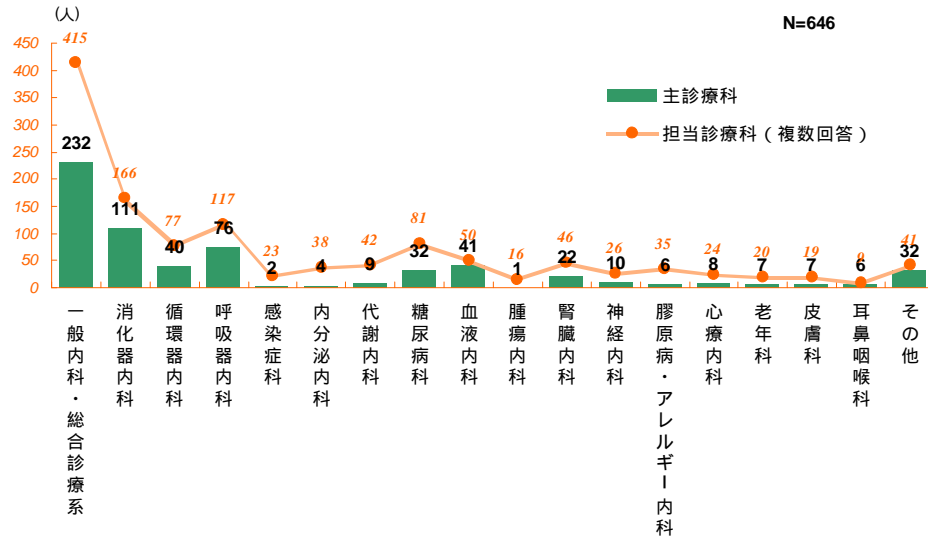
### 主な勤務先の勤務形態



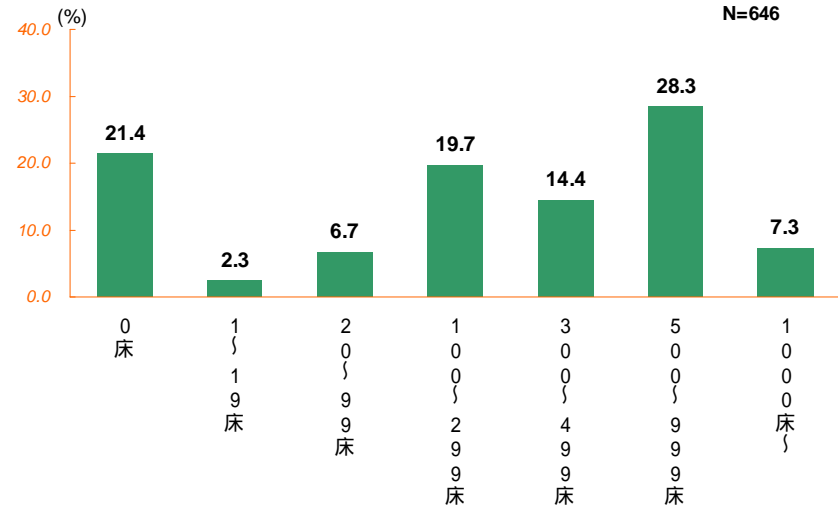
### 対象者年齢



### 担当診療科



### 主勤務先の病床規模

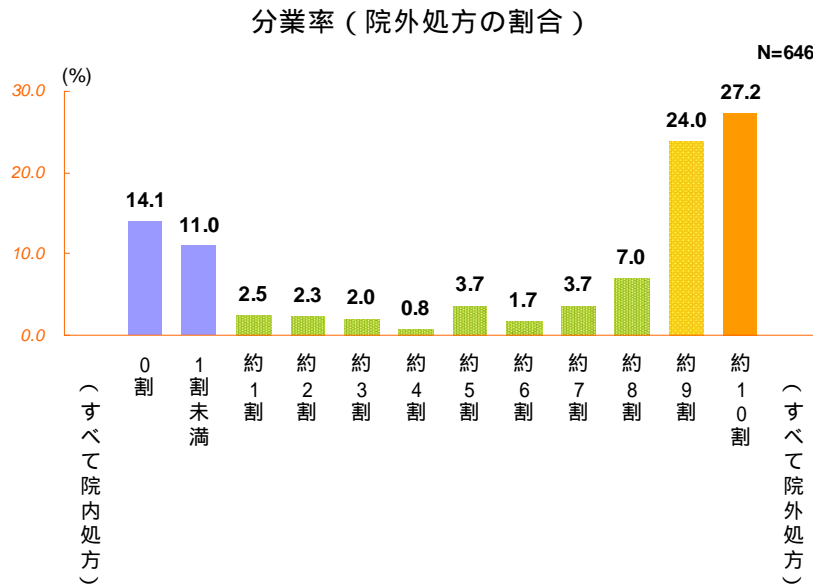


---

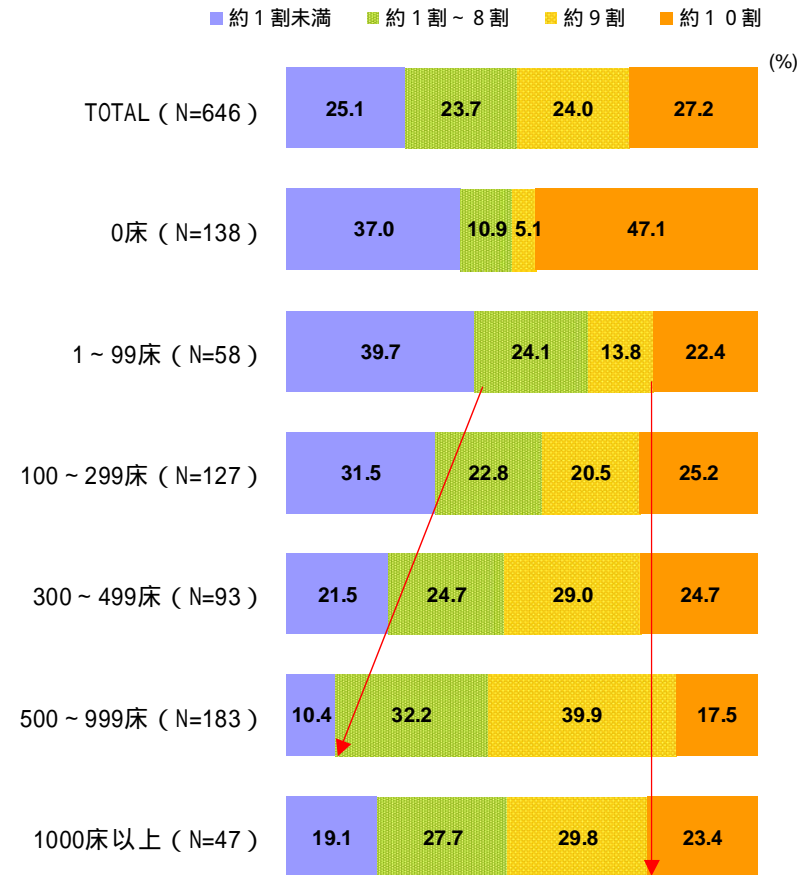
## 3. 調査結果

# 分業率（主な勤務先の院外処方の割合）

- 分業率（院外処方の割合）は、双峰分布（二極化）している。
- 分業率を施設病床規模別にみると、0床（無床診療所）は、極端に二極化しており、「約1割未満」が37.0%である一方、「約10割」の比率も47.1%となっている。
- 1～99床の施設においても、分業率「約1割未満」が約4割を占めているものの、「約10割」の比率は22.4%にとどまっております、無床診療所ほどの双峰分布とはなっていない。
- 特徴的なのは、1～99床以上の施設では、病床規模が大きくなるにつれ、分業率「約1割未満」の割合が減っていくものの、「約10割」の比率が2割前後と、大きな差がない点である。

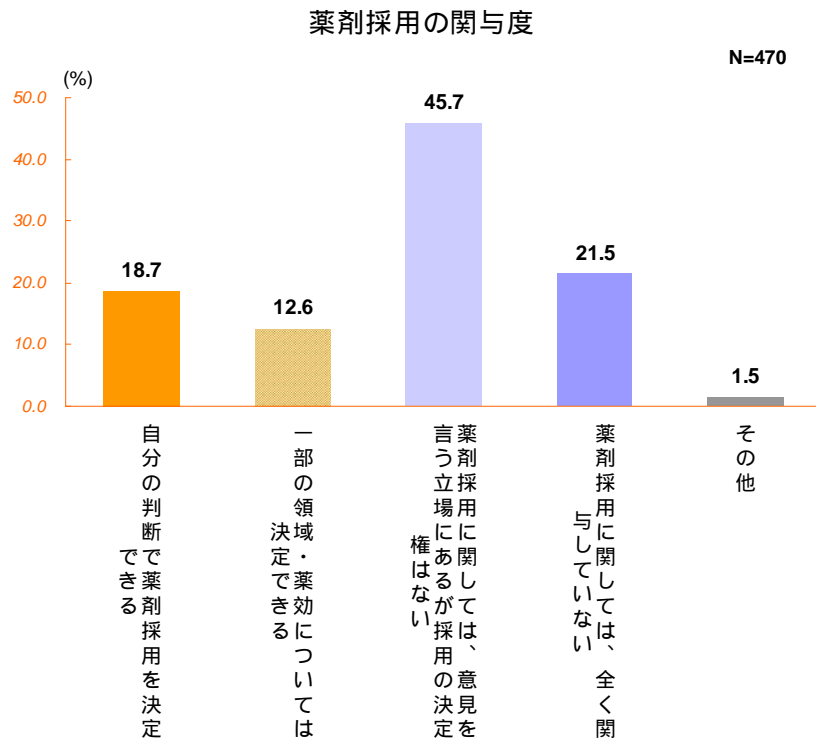


分業率（院外処方の割合）

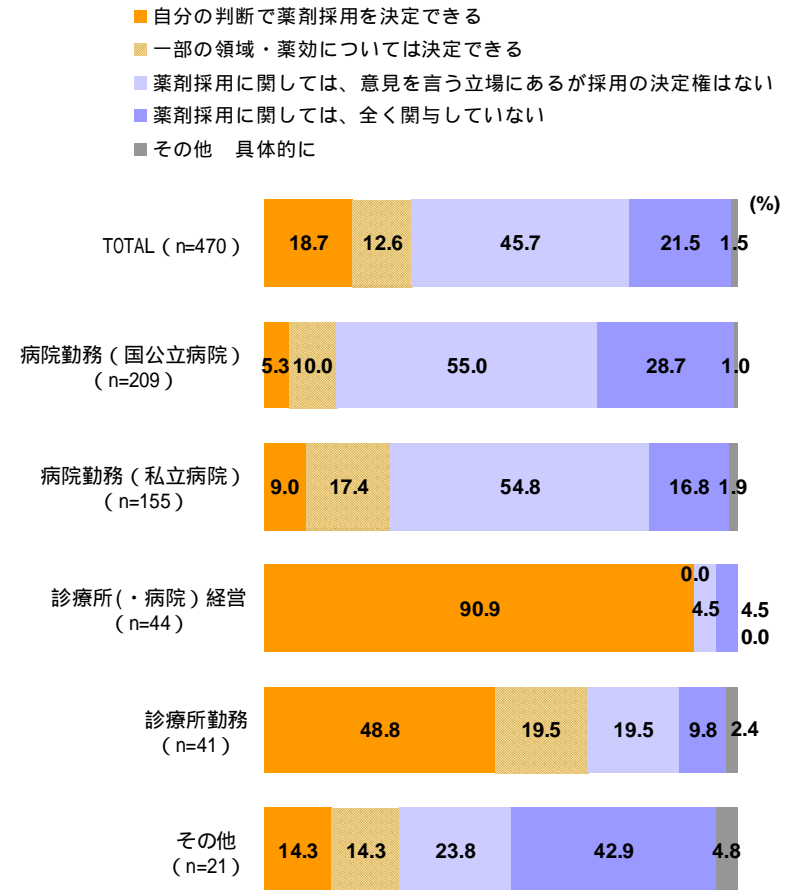


# 薬剤採用の関与度

- 最も多い回答は「薬剤採用に関しては、意見を言う立場にあるが採用の決定権はない」の45.7%。
- 薬剤採用の関与度を、勤務形態別に比較したのが右図。
- 病院勤務医（国公立病院・私立病院）においては、7、8割の医師が薬剤採用の決定権を持たない。
- 一方、診療所勤務医は、約5割の医師が薬剤採用の決定権を委ねられている。

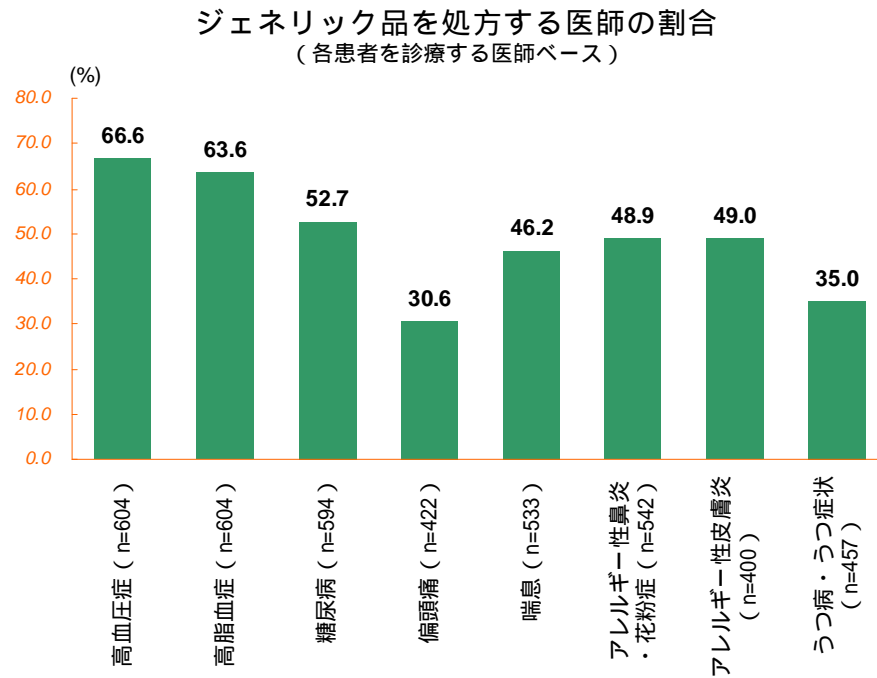


薬剤採用の関与度

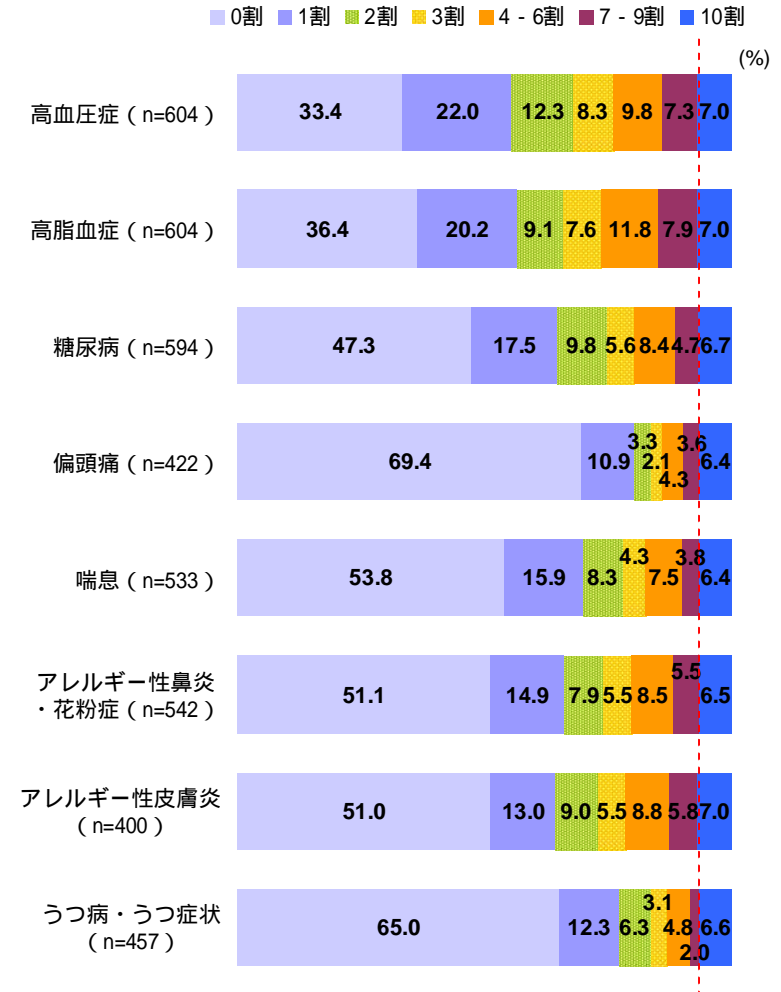


# ジェネリック医薬品を処方する医師の割合、処方割合

- ジェネリック医薬品を処方する医師の割合が最も高いのは「高血圧症」で66.6%。「高血圧症」に次いで「高脂血症」（63.6%）、「糖尿病」（52.7%）と続き、今回の調査疾患領域では、生活習慣病でジェネリック品の処方比率が高いことが分かった（下図）。
- 「アレルギー性鼻炎（花粉症）」、「アレルギー性皮膚炎」、「喘息」についてもジェネリック品の処方比率が5割近い。
- 右図は、ジェネリック医薬品の処方割合の領域別比較である。いずれの領域についても「ジェネリック医薬品の処方比率が10割」と回答する医師が一定割合（7%程度）存在する。



ジェネリック医薬品の処方割合

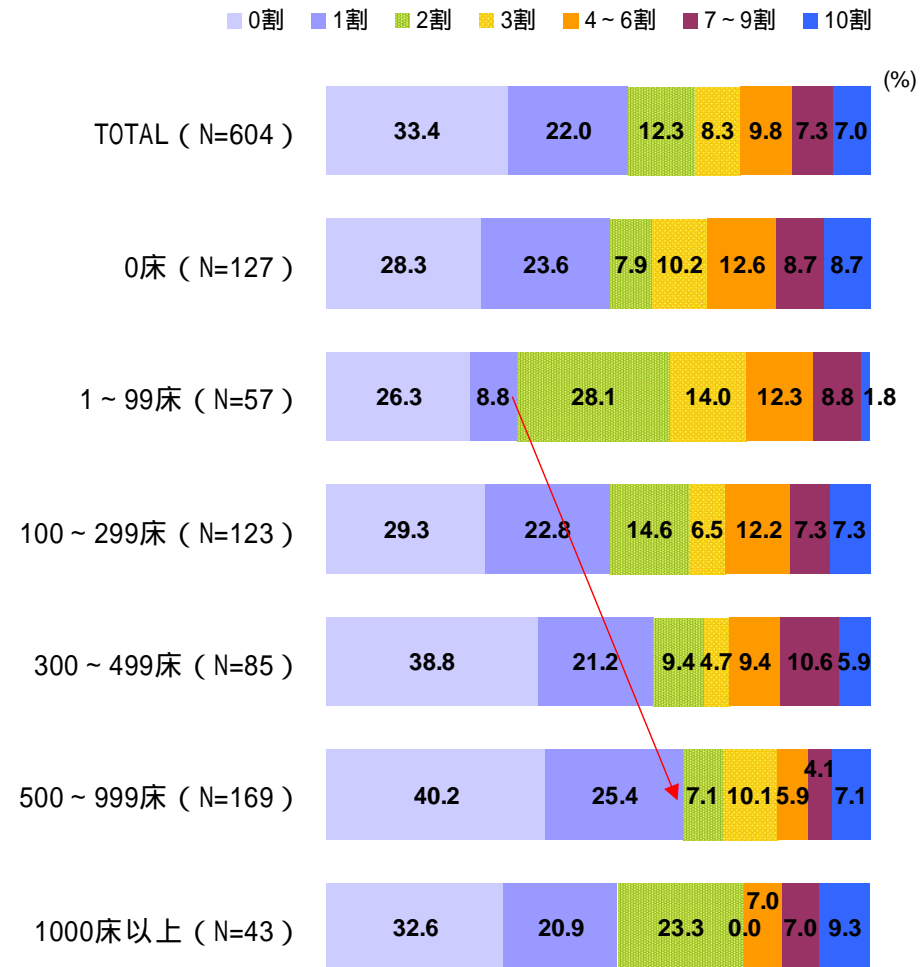


# ジェネリック医薬品の処方割合（高血圧症用薬）

- 「高血圧症」のジェネリック品の処方割合を、病床規模別に比べると、1～99床でジェネリック医薬品を処方する医師の割合が高く、ジェネリックの処方割合が「2割」とする医師が、28.1%を占める。
- 300～499床施設、500～999床施設では処方医師の割合が、他の規模施設に比べ低い。
- 「高脂血症」、「糖尿病」もほぼ同様の内容であった。

## ジェネリック医薬品の処方割合

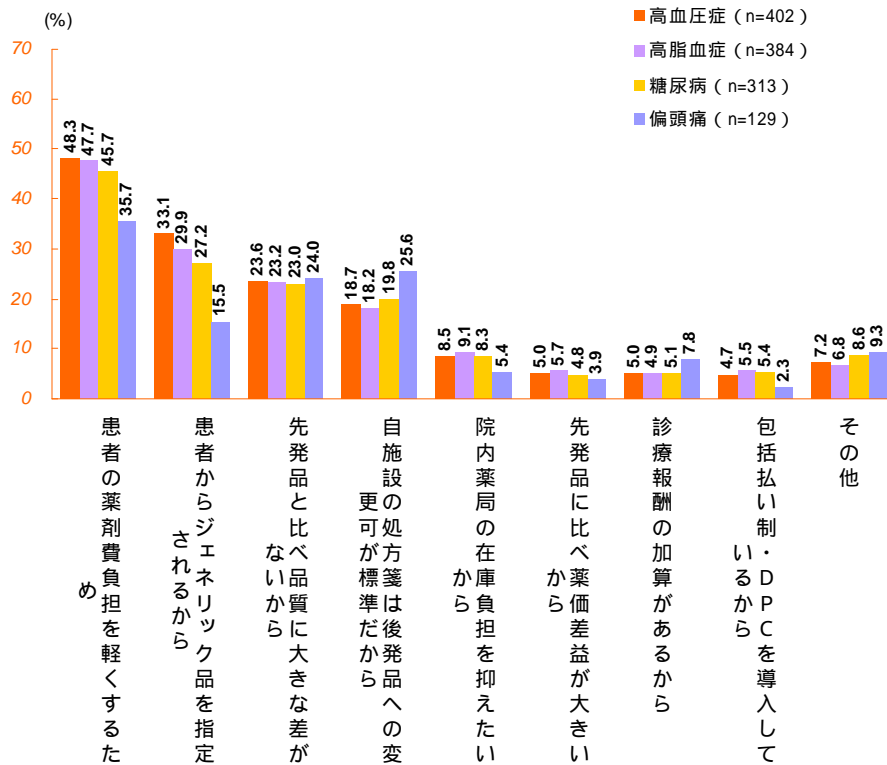
### < 高血圧症 >



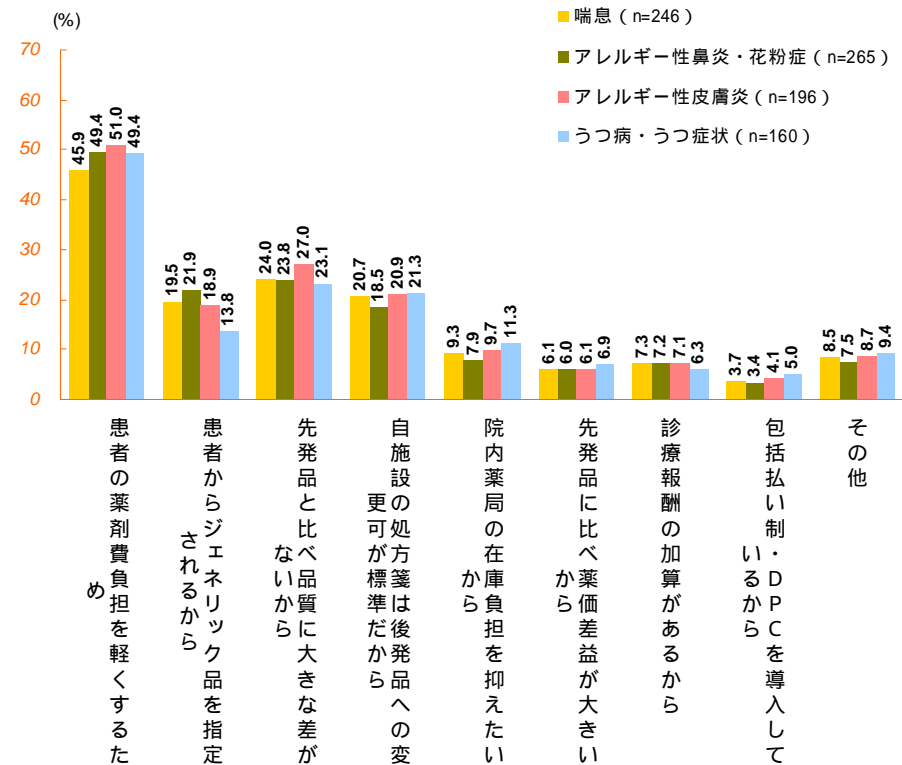
# ジェネリック医薬品の処方理由

- ジェネリック医薬品を処方する理由（目的）のうち、いずれの領域においても最も回答が多かったのは、「患者の薬剤費負担を軽くするため」であった。
- 高血圧症、高脂血症、糖尿病の生活習慣病に関しては、「患者からジェネリック品を指定されるから」が次いで多い。
- 「先発品と比べ品質に大きな差がないから」に関しては、領域別に大きな差がない。

ジェネリック医薬品の処方理由



ジェネリック医薬品の処方理由

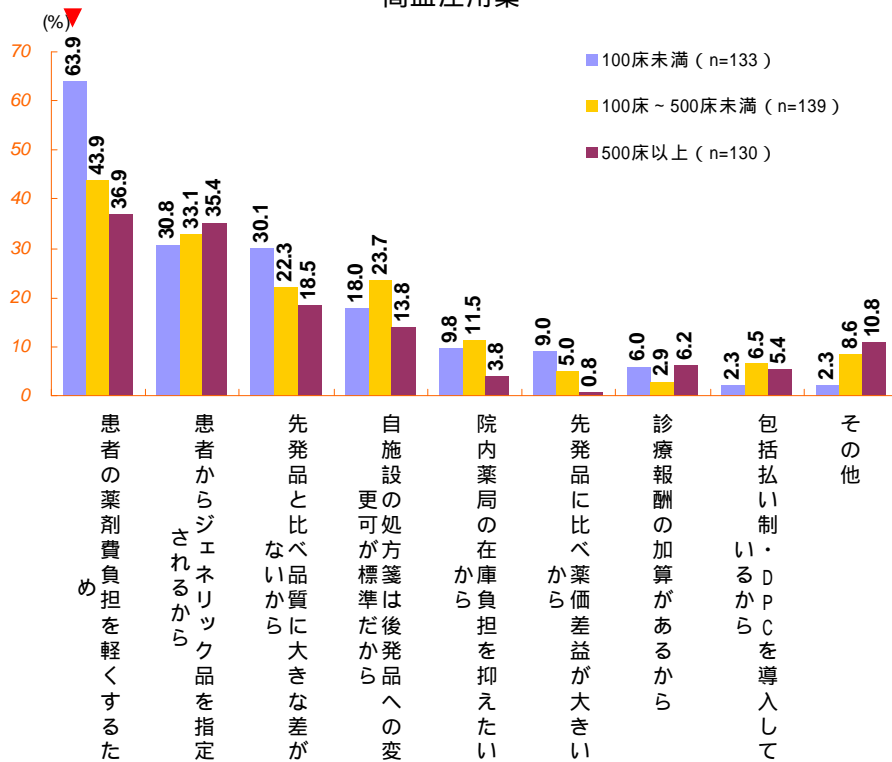


# ジェネリック医薬品の処方理由（高血圧症用薬）

- 高血圧症用薬のジェネリック医薬品の処方理由を、施設規模別に比べると（左図）、「患者の薬剤費負担を軽くするため」は、病床規模が小さいほど、この割合が高い。特に「100床未満」施設で顕著である。
- 処方割合別（右図）では、ジェネリック品の処方割合の低い（「1割～2割」）の施設ほど、「患者からジェネリック品を指定されるから」の割合が高く、一方「自施設の処方箋は後発品への変更可が標準だから」に関しては、ジェネリック品の処方割合が高い施設ほど、その割合が高い。
- ジェネリック品の処方割合が中間の施設では、「患者の薬剤費負担を軽くするため」と「先発品と比べ品質に大きな差がないから」の割合が高い。

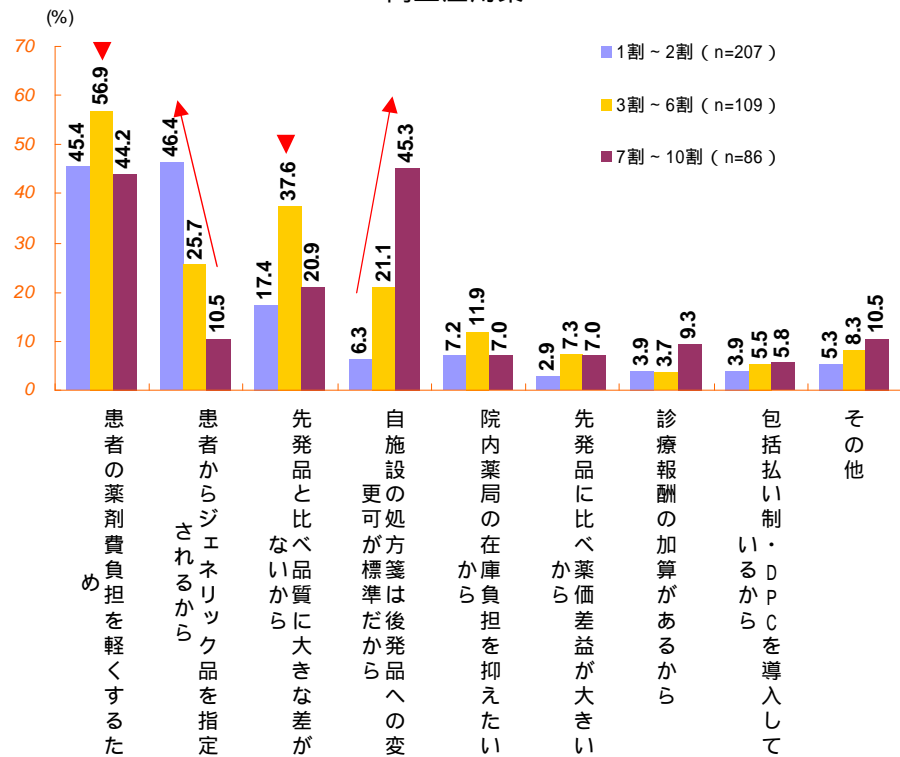
ジェネリック品の処方理由

（施設の病床規模別）  
高血圧用薬



ジェネリック品の処方理由

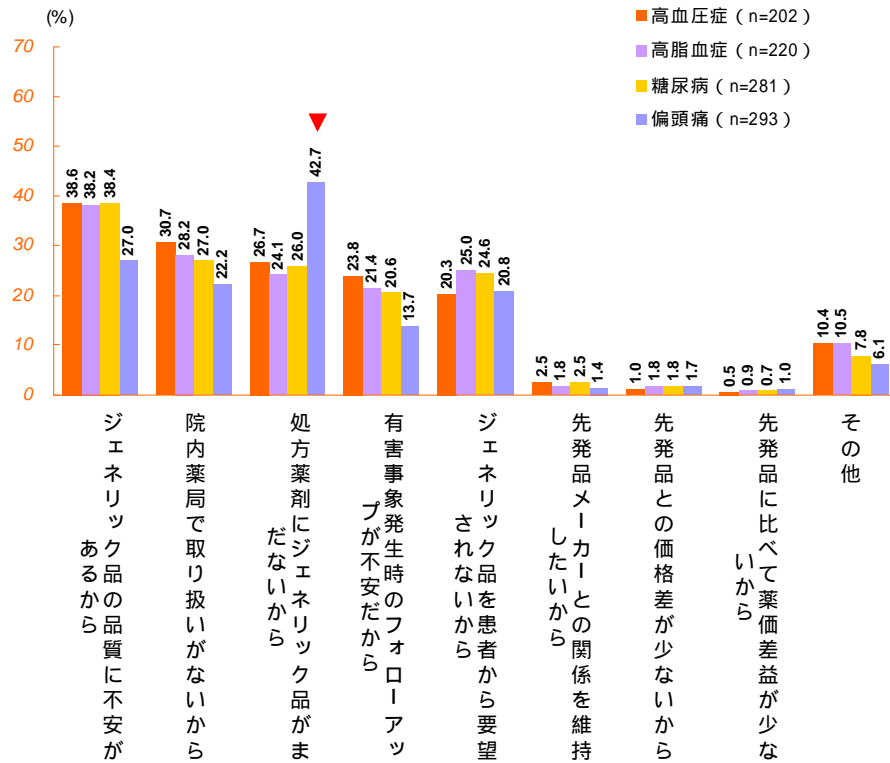
（ジェネリック品の処方割合別）  
高血圧用薬



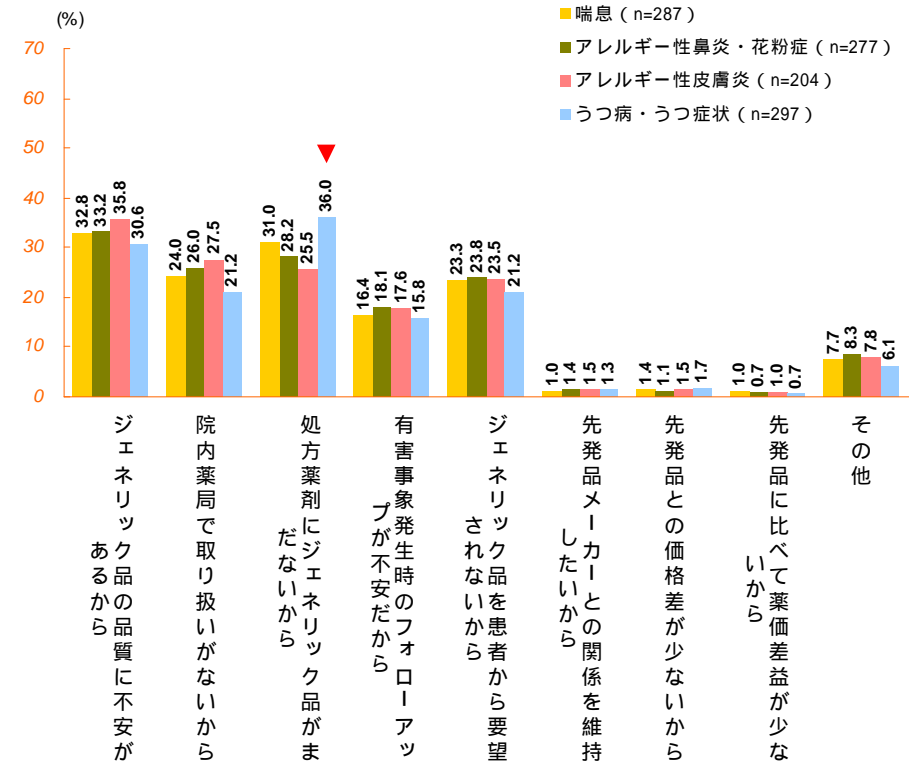
# ジェネリック医薬品の非処方理由

- ジェネリック品の非処方理由は、「ジェネリック品の品質に不安があるから」、「院内薬局で取り扱いがないから」、「処方薬剤にジェネリック品がまだないから」が主な理由。
- 領域別にジェネリック品の非処方理由を比べると、偏頭痛、うつ病・うつ症状で「処方薬剤にジェネリック品がまだないから」が最も多い理由となっている。

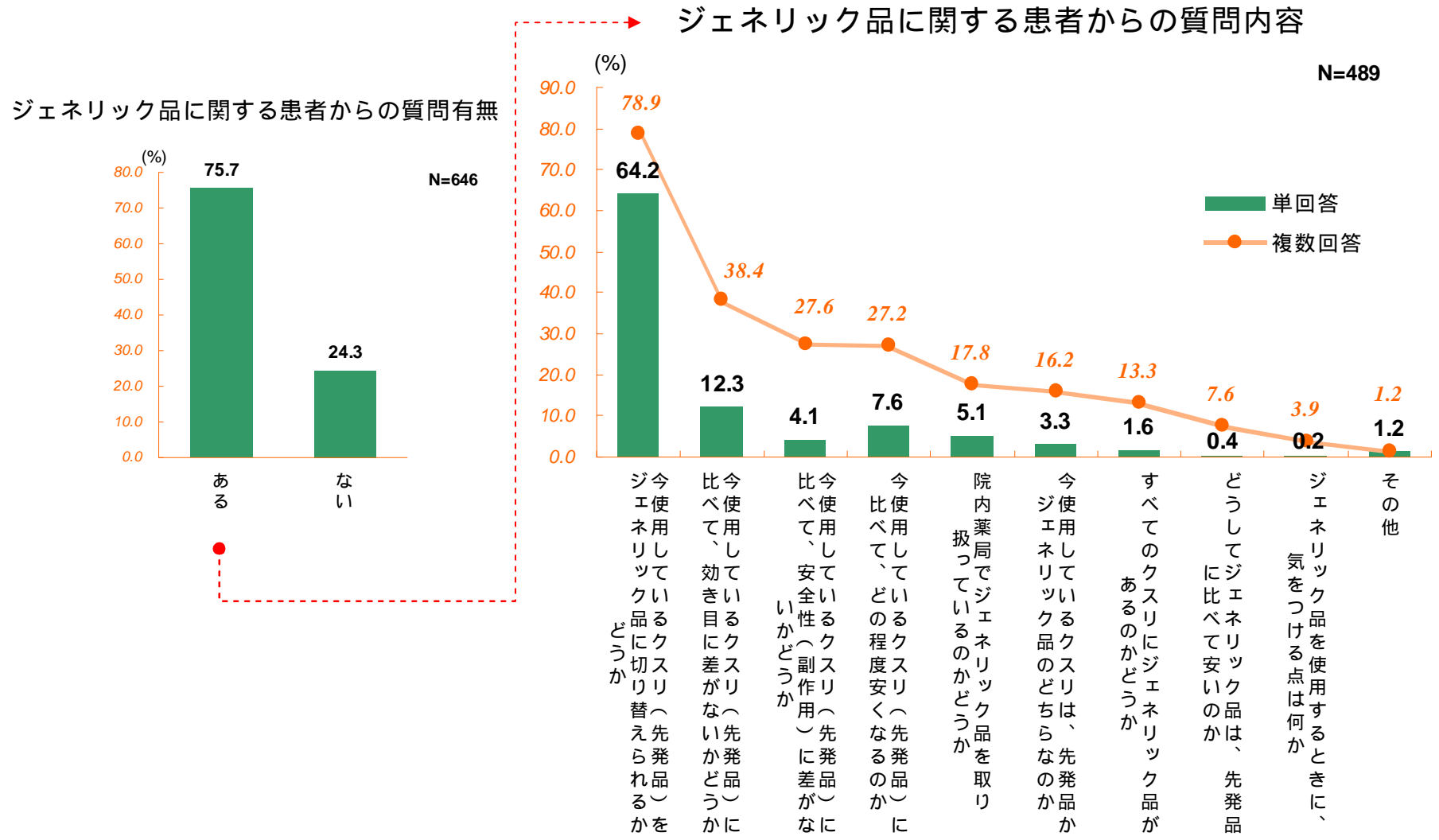
ジェネリック医薬品の非処方理由



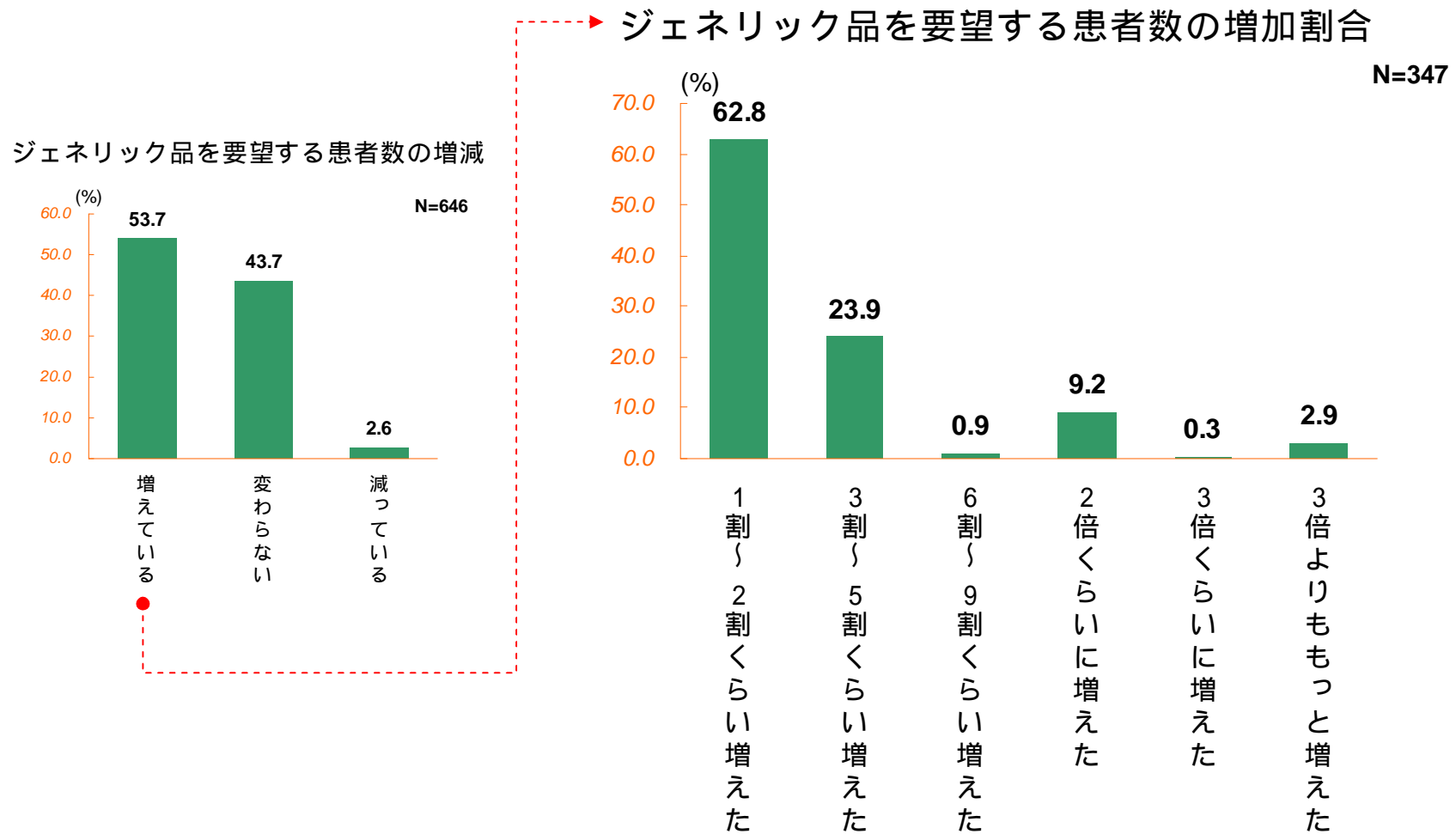
ジェネリック医薬品の非処方理由



# ジェネリック医薬品に関する患者からの質問有無と内容



# ジェネリック医薬品を要望する患者数の増減



---

## 4. 調査結果のまとめ

# 調査結果のまとめ（１）

## 疾患領域別にジェネリック医薬品の処方割合は異なるか？

- 今回の調査対象領域のうち、ジェネリック医薬品を処方する医師の割合が最も高かったのは「高血圧症」で66.6%。一方、最も低かったのは「偏頭痛」の30.6%と幅があった（いずれも当該患者を診療する医師を“100”とした場合）。
- 「高血圧症」以外も「高脂血症」（63.6%）、「糖尿病」（52.7%）の生活習慣病領域は、ジェネリック医薬品を処方する医師の割合が高い。
- アレルギー疾患（「アレルギー性鼻炎・花粉症」「アレルギー性皮膚炎」「喘息」）でも、ジェネリック医薬品を処方する医師の割合は、約5割を占める。
- いずれの疾患についても「ジェネリック医薬品の処方比率が10割」と回答する医師が一定割合（7%前後）存在する。

## ジェネリック医薬品を処方する理由は？

- ジェネリック医薬品の処方理由は「患者の薬剤費負担を軽くするため」、「患者からジェネリック品を指定されるから」、「先発品に比べ品質に大きな差がないから」、「自施設の処方箋は『後発品への変更可』が標準だから」が主な理由。
- ジェネリック医薬品の処方割合が高い施設における、主な処方理由は「自施設の処方箋は『後発品への変更可』が標準だから」。
- 逆に、処方割合が低い施設では「患者からジェネリック品を指定されるから」が主な理由。

## 調査結果のまとめ（２）

---

### ジェネリック医薬品を処方しない理由は？

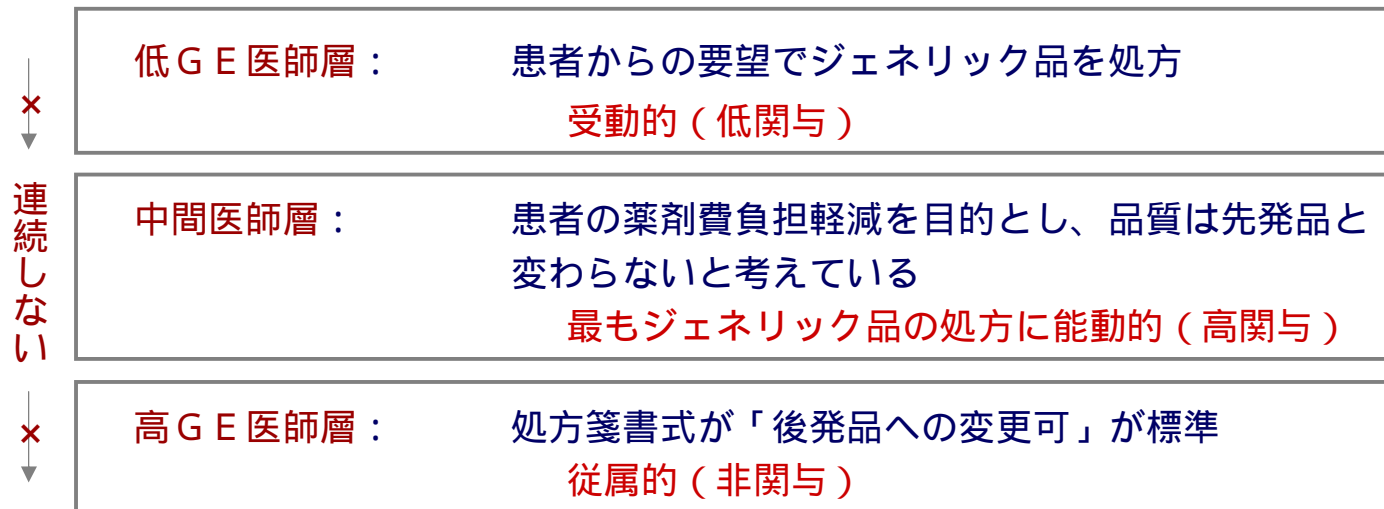
- ジェネリック医薬品の非処方理由は「ジェネリック品の品質に不安があるから」、「院内薬局で取り扱いがないから」、「処方薬剤にジェネリック品がまだないから」、「有害事象発生時のフォローアップが不安だから」が主な理由。
- 「偏頭痛」と「うつ病・うつ症状」では「処方薬剤にジェネリック品がまだないから」が最も多い理由となっている。

### ジェネリック医薬品に関わる患者の反応は？

- 今回の調査対象医師の４人に３人は、患者からジェネリック品に関する質問をされた経験があり、その内容のほとんどは「今使用しているクスリをジェネリック品に切り替えられるかどうか」である。
- ジェネリック品を要望する患者が「前年に比べ増えている」と回答する医師が全体の５割以上を占め、増加の割合も「１割～２割増加」が６割となっている。

## 調査結果のまとめ（総括）

- ジェネリック医薬品の処方比率は、医師の処方マインドの高まりにより、「0割」「10割」に推移するのではなく、外的要因の影響により「低GE医師層」「中間医師層」「高GE医師層」に分類され、それぞれ処方理由・目的が大きく異なる。



- 「低GE医師層」におけるジェネリック品の主な処方理由が「患者からの要望」であり、今後ジェネリック処方を要望する患者が増えると想定するならば、「非GE処方医師層」が「低GE医師層」に移行していく可能性がある（総体としてジェネリックを処方する医師は増える）。
- 一方で、「低GE医師層」のジェネリック品の処方割合が増えていくためには、医師のジェネリック品への処方マインドが高まらなければならず、そのためにはジェネリック品自体の処方実績による信頼性の獲得が必須だと思われる。